



潮の匂いととともに  
よみがえる  
心の風景

## 港と醸造の町

古くから「舟がかりの津」として開けた地内には、良質で豊富な湧水が多く、現在も生活水として利用しているところがあります。江戸中期には、この湧水を利用した酒造が始まり、江戸後期には4軒の造酒家(萬屋・財布屋・阿波屋・新酒屋)で年間約千石(18万<sup>リットル</sup>)の生産量があったと伝えられています。また、これらの造酒家は回船業や海産物問屋なども手掛けて財を成し、松合繁栄の基を築きました。

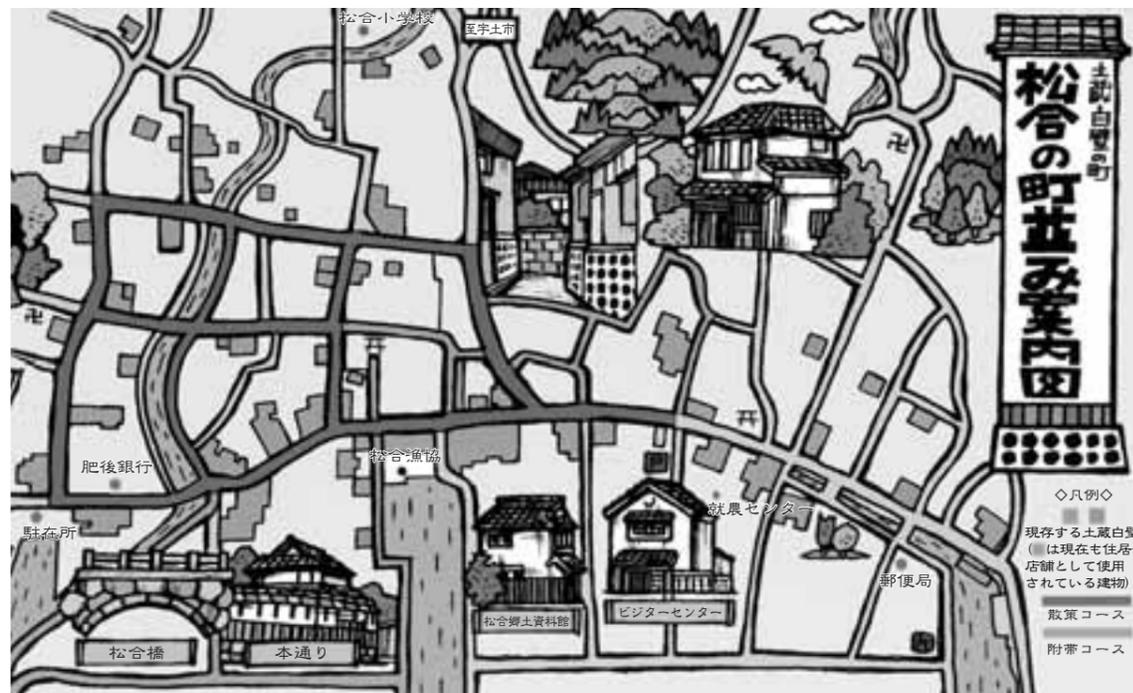
明治になると、地租改正と社会構造の変化に伴って、地主層による土地田畑の集積が行われました。松合の地主層も村外各地に小作地を持つようになり、造酒家の中には小作地からの納入穀物を原材料とした味噌醤油の醸造業に転換する家も現れ、それと同時に新たな醸造家も参入。味噌醤油醸造は松合の主幹産業として定着しました。明治32年に鉄道三角線が開通し、海運の拠点が三角際崎港に移るとともに、松合の回船業や海産物問屋などは三角に移転するようになります。松合の醸造業は、明治から大正、昭和と発展していききました。しかし、戦

## 防火の町づくり

時の物資統制令や戦後の農地法改正の影響を受け、次第に衰退の道を歩むことになりました。

一方、松合は昔から火事の多いことでも知られています。三方を山に囲まれた地形のため、南からの海風が吹き上げて火勢を強めることや、家が密集しているため延焼しやすいことなどが主な原因です。特に文政9年から天保2年にかけての5年間は4度の大火があり、松合の大半が焼けてしまいました。たび重なる火災に心を痛めた藩庁は、被災者の救済として救の浦と屋敷新地に住民を移し、その跡地を区画整理して火除道を作り、辻々には井戸を設けて出火に備えました。また、通りには土蔵白壁の家を配して防火壁の役割を果たさせるなど、当時としては画期的な防災都市の町割りを行っています。

これらと併せて港の整備も図ったので、以後、松合は肥後随一の港として発展し、最盛期は「入船千艘、出船千艘」といわれるほどのにぎわいを見せました。



### ①松合ビジターセンター

この建物は平成6年、数少ない土蔵白壁造りの職人の手によって、昔ながらの工法で建設されました。松合の歴史や、白壁・土蔵造りの工法などの資料が展示してあります。散策のアドバイスや昔の話なども聞ける、「旅人の相談所」です。

開館時間：9：00～17：00  
休館日：毎週月・木曜日・年末年始  
☎42—3550



### ②松合郷土資料館

この建物は明治36年に建造され、大正14年に松合郵便局が新築されるまで、ここで郵便業務が行われていました。松合の繁栄ぶりをうかがえる商家の帳簿類や民具、神秘の火「不知火」の観測記録のほか、劇作家の宮本研、千里眼で有名な御船千津子など、松合ゆかりの著名人の資料も展示されています。

開館時間：10：00～17：00  
休館日：毎週月・木曜日・年末年始  
☎42—3560



明治22年、当時の永尾・松合・大見の3村が合併して松合町となり、昭和31年、旧不知火村と合併して不知火町松合となるまでの68年間、松合には町役場が置かれ、行政・経済の中心地でした。そんな松合を、人々は親しみを込めて「まっちゃん」と呼びます。

しかし平成11年9月に台風18号が不知火町松合を襲いました。多くの尊い命が奪われ、地区は大きな打撃を受けました。しかし今も、土蔵白壁は大切に残されています。歴史を左右する社会変革を経て、もなお、昔ながらの風景を残し続ける松合地区。その歴史を振り返りながら紹介します。

国道266号を三角方面へ。道の駅不知火を過ぎると見えてくる、不知火町松合の土蔵白壁の町並み。この地には、江戸から明治にかけて建てられた土蔵白壁造の建物が数多く残されています。一つの地区に、近世における農・漁・商家の形態をまとめて残しているのは全国的にも珍しく、しかもこれらのほとんどが住居や店舗など実際の生活の場として使われているのです。